

第一章 玉鬘の物語 筑紫流離の物語

[第一段 源氏と右近、夕顔を回想]

*年月隔たりぬれど(年月は経ったものの)、飽かざりし夕顔を(不思議な思いが残って消えない夕顔を)、つゆ忘れたまはず(少しもお忘れなさらず)、心々なる人のありさまどもを(その後に付き合ったそれぞれ異なる女たちの性格を)、見たまひ重ねるにつけても(比べ重ねてお考え為さると)、「あらましかば(あの女が生きていたならば、今頃はどうなっているのだろう)」と、あはれに口惜しくのみ思し出づ(感慨深く喪失感ばかりを思い出します)。*注に<夕顔追慕で語り始められる。「末摘花」巻の冒頭(「思へどもなほ飽かざりし夕顔の露に後れし心地を、年月经れども思し忘れず」)に類似。「夕顔」「露」は縁語。「夕顔」は人名であるが、「夕顔」巻の女主人公の意。夕顔の死から十七年を経過。>とある。面白い指摘だ。ところで、「末摘花」巻冒頭は夕顔が八月に死んだ翌年初めからの話で、「年月经れども」は<季節が過ぎて年が明けても>という意味だった。ということは、4ヵ月ぐらいを「としつきふる」と言っていたわけで、その時点でも分かり難い言い方に思えたような覚えがあるし、今でも「としつき」や「ふる」の語感で4ヶ月程度の短さを言い表すには違和感を感じる。それでも、「年月经れども」の「ども」の重さを心理的に深い時間の長さと考えて当時はその文を納得したような気がするし、今でもそのように納得する。それが今や、夕顔の死から18年目を数える実際の年月の長さである。当時は十七歳の光君も、今年三十五歳だ。「隔つ」は<月日の間を置く>とあり、「経る」という連続性を超えた時間の長さらしい。それでも、「飽かざりし」という思いは変わらない、ということのようだ。「飽く」は<満ち足りる、得心する>または<飽きる、厭になる>で、「飽かず」はその打消だから、夕顔の急死という事情を考えれば<物足りない、未練がある>というよりはもっと漠然と<消化しきれない思いが残る>のだろうし、価値観も定まっていな若い時の事であれば尚更に<いつまでも疑問が消えない謎>で有り続けている、と受け止める。

右近は(夕顔の付き人だった右近は)、何の人数ならねど(殿の情人ではなかったが)、なほ、その形見と見たまひて(やはり夕顔の所縁の者と考えなさって)、*らうたきものに思したれば(懐かしくお思いだったので)、古人の数に仕うまつり馴れたり(古参女房の中の一人として仕え親しんでいました)。*「らうたし」は<庇いたい、かわいい>とあるが、もう少し広げれば<気懸かりな>であり、その「気懸かり」はこの場合<懐かしさ>だ、と思う。

須磨の御移ろひのほどに(須磨に御流浪なされた時に)、対の上の御方に(正夫人に)、皆人びと聞こえ渡したまひしほどより(女房たち全員を預け申しなされた時から)、そなたにさぶらふ(夫人に仕えていました)。心よく*かいひそめたるものに(気立ての良い控え目な女房だと)、女君も思したれど(夫人もお思いだったが)、心のうちには(右近は内心では)、*「搔い潜む」は<隠れる、表立たないようにする>とあるが、「搔く」は<殊更に>という強意で、「殊更に」には<特に>の他に<敢えて、わざわざ>という場合も有るので、右近が<生来特に大人しい>とも取れるし、<生来は然程でも無いが控え目を装っている、猫を被っている>とも取れる言い方で、紫君は<右近を特に大人しいと思っている>が、読者の皆さんは如何思いますか、みたいなことなのか、紫君も含めて<表面上は大人しい右近>を引いて見ているのか、いずれ含みの有る書き方、と見るのは深読みか。ただ、右近は少なくとも見かけは<大人しかった>らしい。

「故君ものしたまはましかば(姫君が生きていらっしやったなら)、明石の御方ばかりのおぼえには劣りたまはざらまし(明石の御方くらいの殿の御覚えは受けていらしたろう)。さしも深き御心ざしなかりけるをだに(然して深い御思い入れの無い方にできえ)、落とし*あぶさず(殿はお見捨て残さず)、取り*したためたまふ御心長さなりければ(良く面倒をご覧になる心変わりの無いお方なので)、まいて(必ずや)、やむごとなき列にこそあらざらめ(最上位の夫人と同列では無いにせよ)、この御殿移りの数のうちには交じらひたまひなまし(この六条院に御入室する夫人方の中には加わって御出でだったことでしょう)」 *「あぶす」は<余す、残す、遺棄する>とある。 *「したたむ」は「認む」で<整理する、処理する>。「取る」は<正式に議題にあげる>。だが、「とりしたたむ」の語感は<取り纏める>ではなく<良く世話する>。

と思ふに(と思えば)、飽かず悲しくなむ思ひける(今も変わらず悲しいと思うのでした)。

*かの西の京にとまりし若君をだに行方も知らず(右近はあの西の京に遺児が居たというのに今では行方も知らずに)、ひとへにものを思ひつつみ(急変に驚いてひたすら姫君の死を包み隠して)、また、「今さらにかひなきことによりて(今更は如何にも成らないことだから)、我が名漏らすな(私の素性を明かすな)」と、口がためたまひしを憚りきこえて(殿が口止めなされた事に遠慮して)、尋ねても訪づれきこえざりしほどに(その娘御を訪ね申すことも無いままに)、その御乳母の男(その後、その乳母の夫が)、*少弐になりて(大宰府の実務管理官となって)、行きければ(任地へ赴くので)、下りにけり(その若君も連れられて下って行ったのです)。かの若君の四つに*なる年ぞ(その若君が四歳になる年の春に)、筑紫へは行きける(乳母一家は筑紫へと旅立ったのです)。 *「かの西の京にとまりし若君」は夕顔の遺児だが、この言い方自体が「夕顔」巻第四章第七段で、光君がその遺児の引取りを申し出た時に右近が言った「さらば、いとうれしくなむはべるべき。かの西の京にて生ひ出でたまはむは、心苦しくなむ。」という返事に呼応している。が、結局は右近はその後に西の京の乳母の家を訪ねることは出来ずに、今や遺児の行方も分からない、と此処に語られている。が、こうした事情は意外では無い。なぜなら、同様の説明は既に「夕顔」巻でも語られていた。即ち、夕顔の四十九日明けの一先ずの話の括りで、夕顔の住んでいた五条の荒れ家が実は若君の乳母の娘の家で、夕顔とは常夏が受領の息子らしき情夫と姿をくらましたまま、一緒に消えたその女君の乳母子の右近が何も知らせて来ないのを、五条の三姉妹は受領の息子が常夏の夫であった当時の頭の中將とは今の内大臣の権勢を恐れたのだろうと推量していた事と、右近自身も女君の死を知らせれば五条の女たちが「かしかましく言ひ騒がむを思ひて」足が向かなかつたし、受領の息子と思われていた光君が頭中將への聞こえを憚って自分の身分と事の顛末を「今さらに漏らさじ」と右近に言い付けていて、右近は「若君の上をだにえ聞かず、あさましく行方なくて過ぎゆく。」ばかりだった。つまり右近の立場を思えば、保護者の責任が果たせずに落ち込んでいて、今後は自らの保護者であろう光君の指示に従う他は無かったわけで、その事情を作者が改めて此処に、光君が「口がためたまひし」を右近は「憚りきこえて尋ねても訪づれきこえざりし」だった、と纏めた次第。そして「夕顔」を読み返せば、「雨夜の品定め」から「夕顔の死」に至る周到なカラクリと、その背景に有る藤壺との不実という劇構成に、作者の技量も然り乍ら、この物語を成立させた時代の奇跡と軌跡と輝石を、改めて感慨深く思う。なお「夕顔」巻によれば、女君の親は三位中將の家柄と右近が話していたから、参議くらいの身分ではあったらしい。また、若君は「一昨年の春ぞ、ものしたまへりし。女にて、いとらうたげになむ」と語られていたから当時で3歳で、「かの若君の四つになる年ぞ、筑紫へは行きける。」とあるので、その翌年とは今から16年隔てた17年前のことになる。 *「少弐(せうに)」は<太宰府の次官。帥・大弐の下で、それらの代理として庶務をつかさどる。>と古語辞典にある。官位相当制表を見ると、従五位下とある。この乳母の夫は地方官ながら高官で、当時の頭中將が本気で娘を探せば、居所は見当の付きそうな縁者のようにも思えたりする。ついでに言えば、右近と頭中將は元々

面識があるだろうに、右近は二条院の古女房で中将は今や内大臣だというのに、今まで会わずに来たというのも、身分が違うから互いに別世界の住人なのかもしれないが、少しは気になる。非常に繊細で丹念に仕組まれた夕顔の話の中で、作者には他の処遇がどうしても説得力が無かったのか、右近が二条院に留まって古女房になっているという設定は、私は「夕顔」巻のノートでも気にしていて、どこか劇構成に無理があるのか、何か伏せられたままの実話があるのか、という思いが拭え無い。*「なる年」の語感から<新年>と読み、<初春>だろうと補語した。因みに、地方官任命の県召しの除目は正月だったとされるが、「少弐」ほどの重責高官だと定期以外の任命も有ったかも知れず、そうなる季節が読めない。

[第二段 玉鬘一行、筑紫へ下向]

母君の御行方を知らむと(乳母たちは若君の母御の行方を知りたくて)、よろづの神仏に申して、夜昼泣き恋ひて、*さるべき所々を尋ねきこえけれど(心当たりを色々と聞き回ったが)、つひにえ聞き出でず(遂に探し出せませんでした)。*「さるべき所々」は注に<『集成』は「心当りの諸方」。『完訳』は「しかるべき所」と訳す。>とある。いずれにしても、頭中将や右大臣家に隠れて夕顔の所在を探るのだから、手掛りの筆頭は惟光だろうし、惟光は白を切るだろうし、「所々」と言うのは「よろづの神仏に申して」を受けての寺社参りになりそうだ。

「さらばいかがはせむ(この上はどうしたものか)。若君をだにこそは(若君だけでも)、*御形見に見たてまつらめ(参議の家柄の血筋として御育て申し上げなければなるまい)。*「おんかたみ」は確かに夕顔の忘れ難かる身ではあるものの、姫君の死ではなく行方不明に困っているので、乳母にしてみれば世話になった姫の親筋の家柄か、本来の撫子の親である頭中将の家柄か、を意味する。つまり、参議か大臣という中央重鎮の家柄である。

あやしき道に添へたてまつりて(筑紫などと言う地方にお連れ申して)、遥かなるほどにおはせむことの悲しきこと(京中央から遥かに遠くお暮らしになることの何と不幸なことか)。「あやし」は<不明な、勝手が分からない>だが、中央官僚から見て地方官は見下す者であり<卑しい>を重ね合わせた言い方なのだろう。唐の先進文明を畏敬すると同時に、その覇権を恐れて大陸に張り合うべく、平城京に唐式の中央集権を図ったこの島国の各部族は、恐らく初めて同じ時代の空気を共有した。だから、互いに認め敬い合い互惠の精神で律令国家を築き上げた。その中心技術は漢学だった。しかし平安京になると、やがて唐は滅び、その権威と脅威は弱まった。この島国でも、受領各自の采配で増産を図る実利が有効となる。実権は地方に、というか現場に戻る。それだけに国体の保持、とは軍および警察を管理する中央は実権の上に立つべく、権威だけは、以前の互惠精神とは違う絶対主義で、漢学とそれに続く国学の専門化によって、ますます崇高に奉られる構造を画策する必要があった。そんな事情が垣間見える表現。

なほ、*父君にほのめかさむ(やはり、父親の頭中将にお知らせ申そうか)」と思ひけれど(と乳母たちは思ったが)、*さるべきたよりもなきうちに(都合の良い伝手も無いままに)、*「ちちぎみ」は頭中将だが、そうすると「御形見」は右大臣家の血筋を意味していたかもしれない。*「さるべきたより」は微妙な言い回しだ。夕顔が頭中将や右大臣家から逃げていたのも、撫子を隠していたのも乳母たちは承知している。と同時に、夕顔が行方不明になった今となっては、自分たちからは言い出せないが右大臣家側が夕顔の不在を聞き付けて、撫子を取り上げて行くのは止められないし、その方が若君のためにも良さそうだ、と言う事情である。だから乳母たちは、隨身の家の郎党や女房などには婉曲に女君の行方を尋ねて回ったのかもしれない。

「母君のおはしけむ方も知らず(母君のいらっしゃる所も分からないのに)、尋ね問ひたまはば(中将がお尋ねになったら)、いかが聞こえむ(如何お答え申せましょう)」

「まだ、よくも見なれたまはぬに(まだ見慣れていらっしゃらない内に)、幼き人をとどめたてまつりたまはむも(幼君をお渡ししてしまうのも)、うしろめたかるべし(旅路の身に気懸かりになるでしょう)」

「知りながら(かと言って、若君の居所をお知りになった)、はた(その上では中将は)、率て下りねと許したまふべきにもあらず(若君を連れ下って良いとはお許しにはならないでしょう)」

など、おのがじし語らひあはせて(自分たち同士で話し合っ)、いとうつくしう(とても可愛らしく)、ただ今から気高くきよらなる御さまを(もう今から気高く整った顔立ちの若君を)、ことなるしつらひなき舟に乗せて漕ぎ出づるほどは(特に飾り立てもない舟に乗せて筑紫に向けて漕ぎ出すことになった次第には)、いとあはれになむおぼえける(乳母たちはとても情けなく思ったのです)。

幼き心地に(若君も幼心に)、母君を忘れず、折々に、

「母の御もとへ行くか(私たちはこれから、お母さんの所に行くのか)」

と問ひたまふにつけて(とお尋ねになるにつけて)、涙絶ゆる時なく(涙が止まる事無く)、*娘どもも思ひこがるるを(乳母の娘たちも女君を懐かしんで会いたがるのを)、「舟路ゆゆし(涙は船旅に縁起が悪い)」と、かつは諫めけり(乳母は一方では制していました)。*「むすめども」は五条の家の女房たちなのだろう。注には<乳母の娘たち。大宰少式との間の子。玉鬘には乳母子、乳姉妹の関係になるが、既に娘盛りに近い。>とある。

おもしろき所々を見つつ(娘たちは海岸の美しい風景を見ながら)、

「心若うおはせしものを(母君も気の若い方でいらしたから)、かかる路をも見せたてまつるものにもがな(こうした旅路の景色もお見せ申せばお喜びだったでしょうにねえ)」

「おはせましかば(母君がいらしたら)、われらは下らざらまし(お世話を申し上げる私たちは筑紫へは下らなかつたのよ)」

と、京の方を思ひやらるるに(京の方を思い遣る娘たちには)、*帰る浪もうらやましく(寄せ返す波も羨ましく)、心細きに(見知らぬ土地での生活も不安で)、舟子どもの荒々しき声にて(船頭らが荒々しい声で)、*「帰る浪も羨まし」は注に<『源氏積』は「いとどしく過ぎ行く方の恋しきに羨ましくも帰る波かな」(後撰集羈旅、一三五二、在原業平・伊勢物語、七段)を指摘。>とある。確かに、いかにも歌語風な言い回しだ。

「うらがなくも(何とも寂しく)、遠く来にけるかな(遠くに来たものだ)」

と、*歌ふを聞くままに(歌う民謡を聴きながら)、*二人さし向ひて泣きけり(二人差し向かって泣いていました)。*この歌に付いては特に説明が無いので、民が唄う歌なら取り敢えずは民謡かと思う。また、注には「聞くままに」について<「ままに」(名詞「まま」+格助詞「に」)～するや否や、～するなりすぐ

に、のニュアンス。>との説明があるが、「二人さし向ひて」は咄嗟の感情ではなく、しみじみと共感したと言う描写かと思う。*五条の娘たちが二人姉妹だったことは「夕顔」巻には明示されていなかったような気がする。勘違いかもしれないが、2~3人ではっきりしなかった印象だ。

「舟人も たれを恋ふとか 大島の うらがなしげに 声の聞こゆる」(和歌 22-01)

「誰を思うか 舟方さん 歌も悲しい 宗像さん」(意識 22-01)

*注に<姉の歌。「大島の浦」と「心(うら)悲し」の掛詞。『完訳』は「夕顔追慕の歌」と注す。>とある。また古語辞典にも、「おほしまの」は<島は海が近いことから「うら」に、また、大島と本土との間で海流が渦巻く「鳴門」の音を延いて「~なると」に洒落て掛かる>枕詞、とある。どうやら、この歌の工夫は「大島のうら」という洒落言葉だけらしいが、この歌の情緒はやはり舟人の歌う民謡の背景が説明されることと、今の旅路が山口県の周防大島の辺りなのか、福岡県の宗像大島付近なのか、という情景の違いによって決定されるのだろう。この後に「金の岬過ぎて」という記事があるので、場所はどうやら宗像大島付近を航海中と見て良さそうだが、民謡の方は<都を遠く離れた敗北感>という表記上の語意以上の意味は読めない。まあそれでも、いよいよ太宰府近くに来て、これから見知らぬ土地で暮らしてゆくという実感を込めた歌らしいことは推察できる。季節は一応、春と見ておく。

「来し方も 行方も知らぬ 沖に出でて あはれいづくに 君を恋ふらむ」(和歌 22-02)

「いっそ行方も知れぬなら 此処で会うのも百年目」(意識 22-02)

*注に<妹の唱和歌。『完訳』は「亡き夕顔に呼びかける歌」と注す。>とある。見知らぬ土地に来た「こしかたもゆくへもしらぬ」自分たちの心細さに、行方不明の女君を「あはれいづくに」と重ねて同情する、というところか。「百年目」は<全ての終わり>を意味するらしいが、少し拵げて<決着→解決>の願意と、誤解とは言うものの<百年に一度の奇跡>の語感も敢えて込めて、是がこの歌の気分だろうと独善する。

鄙の別れに(都を遠く離れた寂しさを姉妹はこのように詠んで)、おのがじし心をやりて言ひける(互いに慰め合っていました)。「ひなのわかれに」は注に<『源氏釈』は「思ひきや鄙の別れに衰へて海人の縄たき漁りせむとは」(古今集雑下、九六一、小野篁)を指摘。>とある。確かに歌語風な言い回しだ。Webサイト「古今和歌集の部屋」によれば、引歌は「おきの国に流されて侍りける時によめる」と詞書があって、「おののたかむら」が隠岐の島へ流された37,8歳の時の歌とある。流浪の嘆きということでは、この歌は「須磨」巻での記述にも参照されていた。「おとろへて」は<左遷された権力闘争での敗北>と<左遷されて挫かれた自負>の複意かと思う。で、引歌は率直に<思っても見なかった、こんなふうには左遷の敗北感で漁民の縄を手繰って漁をして暮らすとは>と言っているのだろうが、それだけに変わらぬ選民意識と中央志向を強く打ち出していて、貴族の共感を得たのだろう。平民目線は皆無で、最高位の文官であればそれが当然で自然だし、それでこそその説得力だ。ともかく、「鄙の別れに」には中央を追われた敗北感、惜寂感が込められているのだろう。

金の岬過ぎて(鐘崎と地島の海峡を抜けて大島を臨んでも)、「われは忘れず」など、世ととももの言種になりて(この旅路ならではの言葉を口癖のように言って)、かしこに到り着きては(府庁に到着してからは)、まいて遥かなるほどを思ひやりて(ますます都から遠く離れたことを考えて)、恋ひ泣きて、この君をかしづきものにて(若君を大事に育てることが中央との繋がりを失わないことのように思って)、明かし暮らす(暮らしていました)。「かねのみさき」は福岡県宗像市鐘

崎の織幡神社の突端の<鐘ノ岬>とされている。西海道を下って太宰府庁を目指すなら、玄界灘の海岸線を西へ進んで、志賀島を回り込んで博多湾に入り、御笠川を上る。「大島」の歌を詠んだのだから、既に鐘崎と地ノ島の間を抜けていたことになる。もう、太宰府は間近だ。また注には<「ちはやぶる金の岬を過ぎぬとも我は忘れず志賀の皇神」(万葉集巻七)。『集成』は「我は忘れず」(夕顔のことはいつまでもわすれない)などということが」と注す。>とある。万葉集の歌は、「志賀の皇神(しかのすめがみ)」が福岡県福岡市東区の志賀島(しかのしま)にある志賀海神(しかのかいじん)の社を天皇家の祖先として祭るという国家精神であることから、内海の博多湾を出陣して「ちはやぶる(荒れ狂う)」玄界灘の「金の岬」を北上して対馬を目指す太宰府兵士の気概を感じる軍歌の趣だ。ただ、娘たちがこの歌を引く心はさすがに戦闘意欲ではなく、「我は忘れず」の言葉を借りて、女君を懐かしむと言うよりは京都暮らしを懐かしんで、延いては自分たち自身の京都人たる育ちのよさをその古式ゆかしい厳かさにあやかろうとした、ものなのだろう。

夢などに(女君は乳母たちの夢などに)、いとたまさかに見えたまふ時などもあり(ごく稀には現れなざる時がありました)。*同じさまなる女など(光君が枕上にご覧になったのと同じような女が)、添ひたまうて見えたまへば(その乳母たちの夢に女君に付き添いなさって現れなざると)、名残心地悪しく悩みなどしければ(目覚めが悪くて不吉を覚えもしたので)、*「同じさまなる女」は注に<『集成』は「夢に見えた女が魔性のものだからで、乳母も夕顔の身の上に何か変事が起ったのだろうと思う。某の院で枕上に立った女である」。『完訳』は「夕顔頓死の折、枕上に現れた女。源氏の夢にも現れた。乳母は真相を知らないが、語り手が理解して語る。尊敬語に注意、女は高貴」と注す。>とある。「夕顔」巻第四章第四段に「宵過ぐるほど(夜も更けて)、すこし寝入りたまへるに(少し寝入られた頃)、御枕上におんまくらがみに、源氏の枕元に)、いとをかしげなる女あて(それは美しい女が座し現れて)、」と<夜半にものけの現る>場面が語られていた。そのまま夕顔は急死したのだが、その「ものけ」を「同じさまなる女など」という説明だけで済ませる語り口は、どうも良く分からない。そうは言っても他に考えようも無いから、先ずそういう事なのだろうが、いくら当時でも作者も読者も是で納得していたというのが、私には納得しにくくてしょうがない。まあ私のことなど、当時の人の眼中に無いのは当たり前だが。

「なほ、世に亡くなりたまひにけるなめり(やはり女君は亡くなっていらっしゃるのだろう)」と思ひなるも(と乳母たちが思うようになるのも)、いみじくのみなむ(仕方ない事でした)。

[第三段 乳母の夫の遺言]

*少弐、任果てて上りなどするに(少弐は任期が終わって帰京を考えたが)、遙けきほどに(遠い道のりでもあるので)、*ことなる勢ひなき人は(中央での出世に特には見込みが立たないこの人は)、*たゆたひつつ(上京の決心が付かず)、*さすがしくも出で立たぬほどに(あっさりとは出発しないでいるうちに)、*注に<大宰少弐の任期は五年。>とある。つまり今は任期満了後の筑紫に来てから6年目の多分、春なのだろう。*「ことなる勢ひなき人」に付いては、注に<『完訳』は「格別の勢力も財力もなく、旅費に困る。清貧潔白の行政官であつたらしい」と注す。>とある。が、大宰少弐は実務官としては最上位の役人であり、「旅費に困る」は有り得ない。官職に関して言うなら、この人は最上位の地方官だった故に、年齢は明示が無いが若くは無く、是が最後のお勤めで定年を迎えるか、京に戻ってもこれ以上の地位が望めない事情だったのでないだろうか。なお、「いきほひ」には<威力、権勢>の他に<威勢、氣勢>もある。だから「ことなる勢ひなき人」は<特別な意欲や気概の無いこの人>という意味にも読めるかと思う。だが、この12文字を、中央の有力貴族の引きが無いので名誉職に有り付けず、とか、職務上の面識を以ってしても人脈を築き上げられなかった、な

どと読むのは深読みが過ぎる気がする。なのでこの人は、一方では融通の利かない「清貧潔白の行政官であった」可能性もあるが、他方では機知や機転の利かない中央の権威を振りかざして地方苛めをするだけの小者だった可能性もある。*「たゆたふ」はくゆるゆらと揺れて定まらない。漂う。ためらう。>と古語辞典にある。*「すがすがし」はくきっぱりあっさりしている潔い様>のようで、「すがすがしくも出で立たぬ」は単にくずるずる日延べした>だけではなく、<権威を笠に来て退官後も人々に供応を強要した>ような含みも有るのかも知れない。

重き病して(重い病を患って)、死なむとする心地にも(死に掛けて弱気になっても)、この君の十ばかりにもなりたまへるさまの(この若君が十歳にお成りになって)、ゆゆしきまでをかしげなるを見たてまつりて(非常に美しく成長なされたお姿を拝見いたして)、

「我さへうち捨てたてまつりて(私までがお世話をし申さずしては)、いかなるさまに*はふれたまはむとすらむ(若君はどのような状態でこの世を流浪なさることやら)。*「はふる」は「放る」で<住所不定で流離う>。

あやしき所に生ひ出でたまふも(このような辺鄙な田舎でお育ち為さったのも)、かたじけなく思ひきこゆれど(勿体無く思い申し上げるが)、いつしかも京に率てたてまつりて(早い内にも京へお連れ申して)、さるべき人にも知らせたてまつりて(然るべき方にも消息をお知らせ申して)、御宿世にまかせて見たてまつらむにも(後にご自身の御運勢にお任せ申そうと存じますにも)、都は*広き所なれば(都は相談できる人が多いところなので)、いと心やすかるべしと(何とかなるだろうと)、思ひいそぎつるを(思って上京の準備をしていたが)、ここながら命堪へずなりぬること(私はもう寿命が尽きそうだ) *「広し」は<多い、多く行き渡る、寛大だ>とあって、此处では「心やすかるべし(何とかなるだろう)」と思える条件だから<色々と手を尽くせる→縁故が多い>かと思う。ただし、少弐自身の身の振り方を相談できる縁故ではなく、若君の将来を相談できる縁故という意味かとは思ふ。いや、是だから少弐は機転が利かない。頭中将は今や内大臣だが、10年ほど前のこの時点でも光君勢は不遇に差し掛かっていたとしても、中将は右大臣家との縁もあって中央政界に留まっていたのであり、若君の縁を中将への持ち掛けようによっては少弐自身の運も開けたかも知れないだろう、とは思える。尤も、そんな展開では劇構成が破綻するので、少弐はこうした人物像にならざるを得ないのかも知れないし、実際にこうした人物が居たのかも知れない。

と、うしろめたがる(行く末を憂います)。男子三人あるに(をのこごみたりあるに、そして儲けていた三人の子息に)、

「ただこの姫君、京に率てたてまつるべきことを思へ(ただこの姫君を京にお連れ申し上げることだけを考えよ)。わが身の*孝をば(私の供養などは)、な思ひそ(考えなくて良い)」となむ言ひ置きける(どのように遺言したのです)。*「孝(けう)」は<親孝行>または<親の喪。死者の供養>と古語辞典にある。

その人の御子とは(若君が誰の御子とは)、*館の人にも知らせず(次官官舎の者たちには知らせず)、ただ「孫のかしづくべきゆゑある(孫で大事にすべき縁故のある子だ)」とぞ言ひななければ(という様な言い方を少弐はしていたので)、人に見せず(姫を家族以外の者には会わせず)、限りなくかしづきこゆるほどに(出来る限り匿って御育て申ししていた内に)、にはかに亡せぬれば(呆気無く夫が亡くなってしまったので)、 *「館(たち)」は<官舎>または<小規模な邸宅>。

あはれに心細くて(乳母は悲しく心細くて)、ただ京の*出で立ちをすれど(直ちに京へ向かう旅支度をしたが)、この少弐の仲悪しかりける国の人多くなどして(亡くなった少弐に反感を持っていた筑前の人々が多くて)、*とごまかうざまに(この夫の死後に様々な取立ての請求をしてきて)、懼ぢ憚りて(乳母はすっかり恐縮して)、われにもあらで年を過ぐすに(その返済に気が気でない思いで年を過ごしている)、 *「いでたち」はくみなり>であり、「京の出で立ち」は現代語風に読めば<京風の装い>に見えるが、此処では<京へ向かう旅支度>と読む。 *「とごまかうざま」は<彼是様々>なので、是では乳母が「懼ぢ憚」る中身がまるで分からない。それに大体が、この少弐の人物像は良く分からない。が、「ことなる勢ひなき人」とあるから、少なくとも特に優れた人では無さそう。であれば、上に弱く下に強いという普通の組織人を思い描いて良いのだろう。しかもこの人は少弐という偉い管理官であったのであり、この太宰府に於いては絶大な権威者であった。やはり、この人は退官後も相当威張っていたのだろう。しかし、任官時に在った国王の裏書は、退官後は無いのである。退官後の消費の勘定は個人持ちである。となると、モノをいうのは人望、人徳である。少弐に恩義を感じている人は、退官後も自前で供応する。が、恩義を感じていない者は、退官後にした供応は<貸し>である。その<貸し>が京へ行ってしまえば、債権者は当然取り立てに掛かる。取立てに遭う債務者が「われにもあらで年を過ぐす」のは今に変わらない。と筋が立つので、取り敢えずこの線で読んでおく。

この君(姫君は)、*ねびととのひたまふままに(成人なさるにつれて)、母君よりもまさりてきよらに(母君よりも美しく)、父大臣の筋さへ加はればにや(父である内大臣の藤氏長者の血筋まで加わっている所為か)、品高くうつくしげなり(品があつて可愛らしげです)。心ばせおほどかにあらまほしうものしたまふ(気立ても穏やかで理想的でいらっしやいます)。 *「ねび整ふ」は<成人する>。

[第四段 玉鬘への求婚]

*聞きつつ(噂を伝え聞いて)、好いたる田舎人ども(色気を催した土地の有力者たちには)、心かけ消息がる(思いを寄せて恋文を交わしたがる者が)、いと多かり(沢山いました)。 *柱に<『集成』は「姫君の評判をそれからそれへと聞き伝えて。「聞き継ぎつつ」の音便形」と注す。>とある。

ゆゆしくめざましくおぼゆれば(乳母は参議の家柄の姫君に対して地方官ふぜいが言い寄るなどはけしからぬことと呆れる思いで)、誰も誰も聞き入れず(誰一人と交際を許さず、)。

「容貌などは(顔だちなどは)、さてもありぬべけれど(まずまずですが)、いみじきかたはのあれば(思い障害のある者なので)、人にも*見せで尼になして(誰とも結婚させず出家させて)、わが世の限りは持たらむ(私が生きてい限りは面倒を見るつもりです)」 *「見す」は<見せる、示す>の他に<添わせる、嫁がせる>とある。

と言ひ散らしたれば(と断る方便に言い触らしていたので)、

「故少弐の孫は、かたはなむあんなる(片輪者だそう)」

「あたらものを(折角の管理職の娘御なのに、惜しいことよ)」

と、言ふなるを聞くもゆゆしく(土地の者たちが話すと、乳母はそれがまた許し難く)、

「いかさまにして(何とかして)、都に率てたてまつりて(姫を都にお連れ申して)、*父大臣に知らせたてまつらむ(父君の内大臣にお知らせ申し上げなければならない)。いとみなきほどを(幼い時分には)、いとらうたしと思ひきこえたまへりしかば(大臣は姫をととても可愛くお思いになっていらしたのだから)、さりともおろかには思ひ捨てきこえたまはじ(こうした地方育ちの事情があっても疎かにはお見捨てなさるまい)」 *「ちちおとど」とあるのは、かつての頭中将が参議大納言はおろか、今や内大臣に昇進したことを乳母が知っている、ということだ。藤原殿が内大臣に就任したのは二年前の秋頃なので、この乳母の言葉はそれ以降の、つまりは最近の発言ということになる。

など言ひ嘆くほど(などと言って嘆いては)、仏神に願を立ててなむ念じける(仏や神に事態の打開を願い立てて祈りました)。

娘どもも男子どもも(乳母の娘たちや息子たちは)、所につけたるよすがども出で来て(地の人との縁を結んで)、住みつきにたり(住み着いていました)。心のうちにこそ急ぎ思へど(乳母は心の中では上京を急ぐものの)、京のことはいや遠ざかるやうに隔たりゆく(実生活はいよいよ都を遠ざかるように西に居を移しました)。

もの思し知るままに(姫君も物心が付くに連れて)、世をいと憂きものに思して(身の上を不運にお思いになって)、*年三(ねざう、開運詣で)などしたまふ(などを為さいます)。*二十ばかりになりたまふままに(二十歳にお成りになる頃には)、生ひととのほりて(すっかり成長なさって)、いとあたらしくめでたし(滅多に居ない美人です)。 *「年三」は「ねんさん」「ねそう」とも読むらしく、また「年星」に同じく「開運のために生まれ星を祭る」と古語辞典にあり、注には「一年のうち正月五月九月の三月のそれぞれ前半十五日間、持戒精進して仏菩薩の名号を唱えること。」とある。 *「はたち」については注に「玉鬘は筑紫に来て十六年たった。」とある。ということは、いよいよ六条院完成の年に話が繋がった、ということだ。

この住む所は(乳母と姫君が娘や息子たちの世話で暮らしていたところは)、*肥前国(ひぜんのかくに)とぞいひける(と言う所でした)。 *「肥前」は今の佐賀県と、壱岐と対馬を除く長崎県に及ぶ範囲の旧国名、とのこと。「京のことはいや遠ざかるやうに隔たりゆく」とあったので、太宰府に近い佐賀県よりも長崎県の方に住んでいたか。

そのわたりにもいささか*由ある人は(そのあたりでも少しでも伝手のある人は)、まづこの少弐の孫のありさまを聞き伝へて(誰でもこの少弐の孫の噂を聞きつけて)、なほ(いつまでも)、絶えず訪れ来るも(絶えず結婚を申し込んでくるのも)、いといみじう(もう本当に)、耳かしかましきまでなむ(煩いほどでした)。 *「よしある」は「風流の心得がある」という意味で良く使われるので、此処でも「中央文化に憧れる」とみたいなことかと思ひ、であれば例え「少弐」でも貴家なのだろうとも思ったが、「由」には「手段、方法」や「理由、口実」などもあるので、詮索を避けた。